

「たけしば」伝説から『更級日記』の行程を検証する

飯島裕三

はじめに

前号の『学習院高等科紀要』第十七号では、『更級日記』を天照御神信仰という視点から考察した。その過程で、この日記が平安時代末期に天照信仰が変容する様を生々しく記録した資料であり、日本の信仰史の観点から興味深い作品であることを指摘した。

本論考では『更級日記』の作者の父、すなわち菅原孝標一行がたどった千葉県から箱根の足柄峠に至る行程を、作者が旅の最中に聴き取った「たけしば」伝説をもとに考えてみたい。

(一) 『更級日記』作者の目指したもの

さて『更級日記』の作者は、寛仁四年（一〇二〇）、父親孝標が上総介の任期が終了したのに伴いその年の九月三日、上総の国府を出立し上京の途についた。

上総国府については、市原市惣社・村上地区に想定する説と、市原市市原・郡本地区に想定する説があり、いまだ最終的な結論には至っていないが、日記では同月十五日に雨が激しく降るなか、下総の「いかだ」という地に泊まったと記されている。

同じ月の十五日、雨がきくらしふるに、境を出でて、下総の国のいかだといふ所にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくてもねられず。野中に、丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。その日は雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮らしつ。（小学館日本古典文学全集『更級日記』二八五頁以降の『更級日記』の引用文は同書による。）

この「いかだ」という地名は、「庵なども浮きぬばかり」との連想から、作者によって意図的に改変されたという説がある。こ

のことはすでに小谷野純一氏が同様の連想を抱いた歌が存在することを『万葉集』から『千載集』までの六首を引用して論証している（小谷野純一著『更級日記全評釈』三四頁）。興味深いことは『浜松中納言物語』・『夜の寢覚』にも次のような用例が存在することである。

何となく心あくがれ乱れ暮らすに、うち泣かれて、

杣河（そまかわ）におろすいかだのいかにも言ふべきかたもなくぞなかるる

とあるを、こころざしのあればにや、まことに（いかだのように）浮かぶ心地して、忍びて女君に見せたてまつり給ひて、

（日本古典文学全集『浜松中納言物語』巻三・二四八頁）

御返りは、いとわりなくつつましげにおぼしたるを、せめて書かせたてまつりたまふ。

いかだ師やいかにも思ひよらぬにも浮きてなかるるけさの涙を

（日本古典文学全集『夜の寢覚』巻三・二四三頁）

『浜松中納言物語』、『夜の寢覚』の二つの物語が、藤原定家の書き写した御物本『更級日記』の奥書に菅原孝標女の作であると記されていることは知られているが、日記を含めた三者に「いかだ」・「浮く」・「流る」という縁語の技巧を用いる類似性が見られるのは興味深いことである。そして一同はその翌々日の十七日の早朝「いかだ」の地を出発する。

昔、下総の国に、まののてうといふ人住みけり。ひきぬのを千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱のこらずは昔のあとをいかで知らまし

その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。かたつ方はひろ山なる所の砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風の音もいみじう心ぼそし。（二八五頁）

この「まののてう」は御物本では「まのしてら」とあり、「まの、てう」の誤写説が定説化しつつあるが、その真偽は不明である。古代の上総に望陀（もうだ）郡と呼ばれる地域があり、『養老令』の賦役の規定に、「美濃絶（みののあしぎぬ）」と「望陀布」

の記述がある。『和名抄』には、「望陀は上総国の郡名で、その体は他国の調布と頗る異なる」と説明されている。また『延喜式』にも、

下総国 布一千五百九十端、商布一万一千五十段、鹿革二十張……

(国史大系『延喜式』巻二十三、民部下、交易雑物)

下総国 調。純(あしぎぬ)二百疋、紺布六十端、縹布四十端、黄布三十端。

(右同・巻二十四、主計上)

などの記載があるから、当時、下総国の特産品が織物類であったことは事実で、その生産に携わり巨万の富を築いた人物が存在したことは十分あり得ることである。また、『千葉県地名』(平凡社)によれば、

「馬野郡 『和名抄』に記す上総国海上(うなかみ)郡馬野郷を含む一体に成立した郡。真野郡とも書く。近世の市原郡。現市原市の北西部。」

とあり、竹内理三編『角川日本地名大辞典』(千葉県)によれば、

「馬野郡・中世南北朝時代から見える郡名。上総国のうち。真野郡とも記す。平安末期『和名抄』に見える海上郡馬野郷付近を中心とした地に成立した中世的郡と推定され、また鎌倉期には当郡付近は海上郡であったともいわれる。」

などと記されているので、古代上総近辺に「まの」と称する富豪が実在した可能性は十分に考えられる。舟で移動していた作者の視線は川の中に残る四本の門柱の跡に注がれる。四足(よつあし)門については、『蜻蛉日記』や『枕草子』に次のように記されている。

また、ある者の言ふ。「この殿の御門をよつあしになすをこそ見しか」と言へば、「これは大臣公卿出できたまふべき夢なり」

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、ひんがしの門はよつあしになして、それよりみこしは入らせ給ふ。

(日本古典文学全集『蜻蛉日記』下・二七八頁)
(新日本古典文学大系『枕草子』五段・九頁)

『蜻蛉日記』の例文は、侍女が邸の門を四足門に造り変える夢を見たことから、それは当家から大臣公卿が輩出する夢であると占った時のもの。つまり四足門は大臣公卿という権威を象徴する門であることが分かる。また『枕草子』には、中宮定子が中宮職の大進生昌の邸で出産することになったとき、急遽門を四足に改築し、中宮を迎えるにふさわしい格式に改めたことが書かれている。大進生昌はもとより大臣公卿などには程遠い身分であるが、定子を迎えるにふさわしい格好にするため「四足門」に造り変えたのである。「まののてう」はもとより大臣公卿などではなかったが、その財力と権威の象徴として四足門が構えられていたことになる。その四足門はこともあろうに川の中に建てられていた。この驚くべき上総の富豪の話は、都人を驚かすのに十分なものであつたらう。都からはるか離れた異郷の地に豪壮な邸を構え、巨万の富を蓄えた人物の話は、『宇津保物語』に描かれた紀伊国牟婁郡の神南備種松(かみなびのたねまつ)や、『源氏物語』の明石の入道などの物語上での例が挙げられよう。これは都から遠く離れた異郷の地に、巨万の富を築き上げた人物の逸話が都人の好奇心を掻き立てるものであつたからに違いない。さてその旧跡の記事に続く「くろとの浜」の絶景は、これもまた都の人々が初めて耳にするものであつた。地名の「黒」と白砂の実景。松原、月、風の音。それは屏風に描かれた絵ではなく実在する東国の景色である。噂でしか耳にできない異郷の地の絶景は、これもまた都人の心を強く引き付けるものであつたらう。その現地を体験した者からの情報は、都人の好奇心をいやが上にも掻き立てたと思われる。それを意識してか、日記の作者は限られた書などによる固定化した東国のイメージを払拭するように、自分の目で確認した新たな見聞を紹介しようという意図が透けて見える。その例として、地理的にはこの辺りに『万葉集』以来有名な下総の「真間の継橋」や「真間の手兒奈」にまつわる話が語り伝えられていたはずだが、その伝説は意識的に無視しているように思われる。万葉集では山上憶良や高橋虫麻呂らによって盛んに詠まれた真間の手兒奈のエピソードが平安時代の文献に登場するのは、保延元年(一一三五)～天養元年(一一四四)の十年の間に成った藤原清輔の『奥儀抄』である。この書は『更級日記』から百年ほど後の成立となるが、その『奥儀抄』には、

かつしかのままの井見ればたちならし水をくみけむてこなしぞ思ふ

是はむかし下総国勝鹿郡真間の井に水くむ下女なり。あさましきあさぎぬをきてはだしにて水をくむ。そのかたちたへにして貴女には千倍せり。月を望むが如く、花咲くが如くにて立てるを見て、人々相競こと、夏の虫の火に入る如く、水門に入る船の如くなり。ここに女おもひあつかひて、一生いくばくならぬよしを存して、その身を湊に投ずと云々」

〔日本歌学大系〕第一卷『奥儀抄』中

という伝説は『更級日記』成立当時にも当然下総の地では語られていたに違いない。時代がもう少し後になると、

源俊頼朝臣

かきたえし真間の継橋ふみれば隔てたる霞も晴れて向へるがごと

〔千載集〕卷十八雑歌下

かち人のはしわたりたる所 源実朝

かち人の渡ればゆるぐ葛飾の真間の継橋朽ちやしぬらむ

〔金槐和歌集〕五九二

藤原定家

忘れぬ真間の継橋思ひ寝に通しかたは夢に見えつつ

〔拾遺愚草〕一一七五

などと詠まれ、また十三世紀末～十四世紀初期に成立した『源平鬪諍録』には、房総で再起した源頼朝が武蔵へ向かう途中の下総の国での記述に、

（頼朝は）八幡の原を打ち過ぐれば、業平・実方が心を留めて詠せられける真間の継橋打ち渡り、九箇日の程に当国の府中（下総の国府・市川）におはします。

〔講談社学術文庫『源平鬪諍録』下・六七頁〕

などと記されている。これは更級の作者が歌枕にもなっているような名所古跡を、意識して避けていたように思われる。

東国の地理を記した書としては『伊勢物語』が挙げられるが、平安朝の歌詠みはこの書によって東国のイメージを固定化されていた。『更級日記』の作者には、このような『伊勢物語』の権威によって作り上げられた東国観を突き崩そうという意図があったのではないかと思うのである。

野山蘆荻の中をわくるよりほかのことはなくて、武蔵と相模との中にあて、あすだ川といふ、在五中将の「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり。中将の集にはすみだ川とあり。舟にて渡りぬれば、相模の国になりぬ。(二九〇頁)

これは『伊勢物語』の東下りでも有名な一節を下敷きにして書かれている。しかし、福家俊幸氏が

この隅田川の描写にはほとんど現地を見たこと之感興が感じ取れないことは、都側からの価値観とは異なるところで上洛の記が記されていたことの証左であり、……

(福家俊幸『更級日記全注釈』五三頁)

という注釈を施している。後でもう一度述べるが、筆者は日記の作者が実は隅田川を渡ってはいなかった可能性もあると考えている。隅田川が本来は下総と武蔵国との国境を流れる川のはずである。それなのに日記では武蔵国と相模国との国境を流れるというような誤記は、作者の記憶違いと従来片付けられてきた。が、そう書かざるをえない事情があったのではないだろうか。また「あすだ川」という名称について、隅田川を「あすだ川」と表記する例は存在しないといわれ、誤写説も唱えられるが、後に「中将の集にはすみだ川とあり」とわざわざ断っていることから、現地では「すみだ川」という名称と同時に、「あすだ川」とも呼ばれている。このことは『伊勢物語』には記されていない真実なのだと言標女はわざわざ断わりたかった、ということなのではないか。こういう作者の記述態度は、次の一節にも伺える。

それよりかみは、ゐのはなといふ坂の、えもいはずわびしきを上りぬれば、三河の国の高師の浜といふ。八つ橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。二むらの山の中にとまりたる夜、大きな柿の木下に庵を造りたれば、夜ひ

とよ、庵の上に柿の落ちかかりたるを、人々ひろひなどす。

(二九五頁)

これまた『伊勢物語』でよく知られた一節を下敷きにして書かれたものである。日記の作者は『伊勢物語』では名高い名所も実際にしてみれば、「なにの見どころもな」い、つまらぬ景色であると言う。歌枕でもあった「高師の浜」もその名を記すにとどめ、聞いたこともない「ゐのはなといふ坂」、「二むらの山の中」での出来事を印象深く記すのであった。『伊勢物語』では見逃されていた新たな情報を強烈にアピールしているように思われるのである。そのことで『伊勢物語』に対する作者の対抗心が垣間見える。そういう記述態度の背景には、孝標女が後年宮仕えする祐子内親王家との関係がやはり見逃せない。祐子内親王家では盛んに歌合せが催されたことはよく知られることであるが、特に康平四年(一〇六一)三月に十九日には「祐子内親王家名所歌合」が確認できる。しかも名所題の歌合せには従来とは異なつた新しい試みの見られることが特徴であった。その歌合の趣旨と『更級日記』の記述態度には相関的な関係が感じられる。つまり『更級日記』の目指したものが何であつたのかという問いに対して、その答えの一部が見えてくるように思える。

(二) 『更級日記』の旅のルートを検証する

作者一行は舟で「ふとい川」(江戸川)を渡つたことは確実であろう。

そのつとめて、そこをたちて、下総の国と武蔵との境にてある太井川といふが上の瀬、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつがつ物などわたす。乳母なる人はをとこなどもなくして、境にて子うみたりしかば、はなれてべちのぼる。

(二八六頁)

この「まつさとのわたりの津」が現在のどこを指しているのが判然としない。そして太井川(江戸川)を渡つたあとの一行のルートがきわめて漠然としているのである。この後の足取りとして日記中に確認される地名は相模(神奈川県)の「にしとみ」、「もろこしが原」それから「足柄山」になる。途中で「あすだ川」と記される「隅田川」が出てくるが、先にも述べたように順路から考えても矛盾があり、その描写も型にはまったもので、実際に現場を目にしたものかどうか疑わしい。

では、ここでいう「まつさとのわたりの津」とは下総のどこを指すのだろうか。日記の中でこの「まつさとのわたり」につい

ては後でもう一度言及がある。

その春、世の中いみじうさわがしうて、松里のわたりの月かげあはれに見し乳母も、三月ついたちになくなりぬ。

(三〇〇頁)

こう書かれているので、作者の記憶違いではなく、当時そう呼ばれていた渡し場が確かに存在したことは間違いない。現在多くの注釈書類がこれを「松戸」と推測している。だがその根拠は言葉の相通性ということらしい。しかし上総からやってきたなら、下総の国府所在地であった市川の国府台近辺の渡しを使うほうが便利だと思われる。市川の渡しは古くは市川村と対岸の武蔵国伊予田村、現江戸川区を結び、西に太井川、南の低地に砂洲（市川砂洲）が東西に発達し、その砂洲西端には古代東海道の井上（いかみ）駅が推定されている。また調査によって国府台を南北に貫通する奈良・平安時代の幅六メートルの道路（東海道の本道と考えられる）も確認されている。それというのやはり、市川の渡しは公の渡し場として認められていたからだと思われる。「源平闘争録」では頼朝が多くの軍勢を引き連れて、市川の真間の継橋を通っていることは先に述べたとおりである。また『類聚三代格』巻十六「道橋事」の承和二年（八三五）六月二十九日条に、諸国の渡し船を増加させる太政官符として、

今下総国太日河四艘 元二艘、今加二艘。武蔵国石瀬河三艘、元一艘今加二艘。武蔵、下総両国等堺住田河四艘、元二艘今加二艘。右河等崖岸広遠不得造橋。仍増件船

(新訂増補国史大系『類聚三代格』)

とある。つまり、「下総国太日河」の崖岸が広遠で架橋できないので、渡し船が二艘から四艘に増加させるという条文があるから、市川の渡しには渡し舟が四艘備えられていたことが分かる。ちなみに太井川（江戸川）は下総台地を削ったため、そこに崖が出来、長い間に「河等崖岸広遠不得造橋」というような地形を形作ったといわれる。文中に「住田河」の文字が見えるが、有原業平の東下りの折、隅田川を渡るのに利用した渡し舟も、太政官符によって船が増加された後のことになる。

さて、菅原孝標は前上総介という上総の最高責任者を務めた者であり、その一行は自分の子供たちを含めれば数十人規模になったと推定される。もっとも『源氏物語』「関屋」に記される前常陸の介一行の描写が事実に近いものであるなら、孝標一行の人数も百人を超えていたかもしれない。これだけの人々を京まで無事に連れ帰る安全なルートを考える時、それはやはり古代東海

道の本道を利用することだと思われる。『延喜式』「兵部省」の記述によれば、東海道には十六キロメートルごとに駅家（うまや）が設けられ、休憩したり宿泊することも可能で、そこで食料の補給や馬の交代もできたという。その東海道を利用した場合の参考資料が『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条である。その記載によれば、まず下総国の河曲駅（千葉市中央区）↓浮嶋駅（船橋市海神、もしくは津田沼・鷺沼付近）↓井上駅（市川市市川付近）↓武蔵国・豊島駅（東京都北区御殿前遺跡付近、もしくは台東区谷中霊園付近）↓大井駅（東京都品川区大井）↓小高駅（神奈川県川崎市高津区）↓店屋駅（東京都町田市町谷）↓相模国という順路をたどり足柄山に向かうことになる。（参考文献 古代交通研究会編『日本古代道路事典』）
では次に古代東海道を利用した場合の孝標一行の旅のルートを考えてみよう。

③ 「たけしば寺」への経路 ①

さて、「まつさとのわたりの津」を渡ったあとの一行の経路について『更級日記』には次のように記されている。

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかしき所も見えず。浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひしげりて、中をわけゆくに、たけしばといふ寺あり。はるかにははさうなどいふ所の、らうの跡の礎などあり。いかなる所ぞと問へば、「これはいにしへたけしばといふさかなり。云々」
(二八四～二八八頁)

江戸時代、『更級日記』を読んだ人々は、日記の一行が古代の東海道を利用し、江戸湾の沿岸を進んだに違いないと思つたはずだ。それは「浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて」という記述から考えれば当然かと考えられる。だから『江戸名所図会』の中には『更級日記』の「たけしば寺」に関する記事がかなり長く引用され、次のような解説が付されている。

周光山濟海寺聖坂の上道より左側にあり。浄土宗にして京師知恩院に属す。上古は竹芝寺と号して、巍々たる真言の古刹なりしが、中古荒廢に逮（およ）ぶ。依て法誉上人念無（ねんむ）和尚中興す。

當寺庭中の眺望は、実に絶景なり。房総の群山眼下にありて、雅趣すくなからず。朝夕に漂ふ釣舟は沖に小さく暮れて、数点の漁火波を焼かと疑はる。……四時に觀をあらためて、風人の眼を凝らしむる一勝地なり。月の岬といふも、此邊の惣名なり。

竹芝寺旧址 濟海寺と同じ隣土岐候の邸の地。その旧跡なりと伝ふ。

(石川英輔・田中優子監修 原寸復刻『江戸名所図会』上)

「濟海寺」は港区三田にあり、皇居前から日比谷通りを北に進み、増上寺、芝公園を過ぎ都営浅草線の三田駅のあたりで右折し、聖坂（ひじりざか）という坂を上りその一番高くなったあたりに位置する。『江戸名所図会』を見ると、かなり広い道幅を持った坂として描かれているが、現在は五、六メートルほどの道幅の坂である。寺に隣接した公園内には、亀塚と呼ばれる高さ七、八メートルはあるだろうか、古墳と思われる塚が存在し、子供の遊び場となっている。先に引用した文のあとに『更級日記』文中の「たけしば」伝説がそっくり引用されている。そして、名所図会には山岡明阿の次のような見解が付加されている。

山岡明阿云按ずるに今の地は海辺にて、しかも岡の上なれば更級日記にいへる所になはず。若しいよいよ此寺にてあらば、昔は外にありしを後にこの処へうつせしなるべしと云々。
(前掲書『江戸名所図会』上)

つまり濟海寺は『更級日記』の「たけしば寺」とは必ずしも一致しないのではないか。なぜなら、今の寺の位置が海辺であり、岡の上に在るのが理由だというのである。しかし、『更級日記』本文には「浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて」、「これはいにしへたけしばといふさかなり」という記述があり、明阿のいう「昔は外にありしを後にこの処へうつせしなるべし」という転居説には疑問が残る。そのうえ濟海寺への途中に存在する芝公園には、全長一一二メートルという都内で最大級の「芝丸山古墳」がある。その副葬品の中には「祝部（いはいべ）」という、酒を入れたと考えられる水筒型の土器などが報告され、「たけしば」伝説の中で歌われる酒壺との関連性もうかがわせるのだ。また現在港区に「芝」の地名が残り、先ほどの芝公園・芝浦などの名が存するが、それがいつの時代のものからかの確証はないが、『新篇江戸誌』巻六に「芝はすなはち芝生にて、このあたり武蔵野の末にて、海に逼（せま）れども、猶西北は平原に続き、芝のみ生えれば云ふなるべし。芝生また芝とのみいへる地名、上野、其の外所々在々にて知るべし」（『芝区史』昭和十三年刊）とある。以上のことから、古くこの辺りには土地の有力者が存在し、酒造りも行われていたと推測される。つまり孝標一行は東京湾岸を通る古代東海道を利用し、今の濟海寺あたりで「たけしば」の伝説を耳にした可能性が考えられる。

だが、孝標一行が古代東海道に沿って旅をしたと推定した場合、大きな疑問が残る。それは、古代東海道はきわめて整備された官道であったという調査報告がなされているからである。最近の研究・発掘によって次々と分かってきた事実は、古代の官道

はできる限り直線的に造成され、道幅は六メートル、場合によっては十二メートルの幅を確保していた。そしてその両側には側溝が整備され、道幅は常に一定に保たれるように留意されていた。それというのも古代の幹線道路は律令国家を維持するための生命線であり、道路の補修・保持は周辺の住民の過酷な務めでもあった。(参考・近江俊秀『日本の古代道路』角川選書) だとすれば、孝標一行の旅の記述には矛盾が生じる。

浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひしげりて、

先にも述べたように『更級日記』の作者は、実際に現地へ赴き、現地を体験した者しか語ることのできない事実を強調する傾向があると述べた。だから都人が『古今集』の「紫のひともとゆゑに武蔵野は草はみながらあはれとぞ見る」という歌のイメージで武蔵野を懐かしく思い描くかもしれないが、実際には紫草などは一本も見当たらない。ただ「蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひしげりて」という殺風景な景色こそが武蔵野の真実の姿だと記した。しかしそうだとすると、古代東海道は荒れ果てた状況で道としての機能を果たしていなかったことになってしまう。しかし律令国家が全国に東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七つの駅路を開いたのは、地方を一元的に支配するという重要な目的があったからであった。納税のための農民の利用、軍隊の移動、情報の伝達等、いずれも迅速が求められた。そのために道は整えられ、最短距離になるよう駅と駅との間は直線になるよう設計された。(近江俊秀・前掲書) ならば、日記に記されたような荒れ果てた状態が当時の東海道の姿であったというの明らかにはおかしい。そこで古代東海道を利用しない別のルートの可能性も考えてみたい。

(四) 「たけしげ」寺への経路 ②

孝標一行が太井川を渡った場面を読み返してみると、

下総の国と武蔵との境にてある太井川といふが上の瀬、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつがつ物などわたす。

舟で川を渡るときには、なるべく下流のゆったりした流れの個所を渡るといのが一般的だという。が、「上の瀬」と断っていることに注目すると、一行は通常の渡し場、つまり市川より上流にあった渡し場を利用したという意味にとれる可能性がある。地図で確認すると、松戸は市川よりも七、八キロメートル太井川の上流に位置する。松戸の地というのは古代において西方の武蔵国と北方の常陸国を繋ぐ交通の要衝であり、古代東海道の下総国茜津駅をこの地に比定する説もある。つまり市川から北上して、松戸の渡しを利用したとすれば、その背景には、東海道を使わずに別の目的地に向かおうとしていた可能性がある。恐らくは武蔵国の内陸部を目指したのではないだろうかと思われる。しかし、それは都に戻るには遠回りとなり、第一安全を考えれば無謀な経路といえよう。その上、「夜ひとよ、舟にてかつがつ物などわたす」というのだから、つまりもつとたくさん積み込みたいが、すこしずつ、しかも昼渡れば安全だろうに、なぜわざわざ「夜ひとよ」をかけて人や物資を運ぶのだろう。それはこの渡し場の人や荷物を搬送する能力が劣っていたからではなかったか。恐らく市川の渡しに比べれば、「まつさと」の渡し場には船の数も役夫の数も少なかったからと想像される。

市川に比べれば不便なはずの「まつさと」の渡し場を利用した理由は、京に戻る前に、どうしても立ち寄りた場所があり、そこに行くには古代東海道の道筋からはずれるしかなかった。そして古代東海道から逸れた道を進むためには、整備も不十分な道なき道を進む場合もあったに違いない。それならば「蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひしげりて」という描写も納得がいくように思われる。

この道の描写に関しては次の資料も参考になるかと思う。時代は二百五十年ほど下がるが、『とはすがたり』に武蔵野の情景が描かれる場面がある。それは正応二年（一二八九）、作者である後深草院二条が東海道を下り、鎌倉に入った。二条はその年に暮れに川越の入道と申す後家の尼に招かれ川口に出かけた折の記事である。

師走になりて、川越の入道と申す者の跡なる尼の、「武蔵国に川口といふ所へ下る。あれより年返らば、善光寺へ参るべし」と言ふも、便りうれしき心地して、まかりしかば、雪降り積もりて、分けゆく道も見えぬに、鎌倉より二日にまかり着きぬ。かやうの物隔たりたる有様、前には入間川とかや流れたる、向かへには岩淵の宿といひて、遊女の住みかあり。山といふものはこの国うちには見えず、はるばるとある武蔵野の萱（かや）が下折れ、霜枯れ果ててあり。中を分け過ぎたる住まひ思ひやる。

（新日本古典文学全集『とはすがたり』四四四頁）

その翌年の正応三年（一二九〇）、善光寺に詣でた作者は浅草の浅草寺を訪れるために再び武蔵野を旅する。

八月の初めつ方にもなりぬれば、武蔵野の秋の気色ゆかしさにこそ、今までこれら（善光寺）にもはべりつれと思ひて、武蔵国へ歸りて、浅草と申す堂あり。十一面観音のおはします、靈仏と申すもゆかしくて参るに、野の中をはるばると分けゆくに、萩、女郎花、萩、薄よりほかは、また混じる物もなく、これが高きは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば、押しはかるべし。三日にや分けゆけども尽きもせず。ちとそばへ行く道にこそ宿などもあれ、はるばるの一通りは、来し方行く末、野原なり。

（同・四四八頁）

右の風景描写は『更級日記』に通ったところがあり、彼女が『更級日記』を読んでいた可能性も疑われる。彼女の生年は正嘉二年（一二五八）で、一方『更級日記』を写した藤原定家の日記『明月記』によると、寛喜二年（一二三一）六月十七日に、定家が源家長に『更級日記』を貸したという事が記されている。そこで、彼女が何らかの方法によって『更級日記』を読んでいた可能性は否定できない。さらに飛鳥井雅有（一二四一～一三〇一）が書いた紀行文『春の深山路』の弘安三年（一二八〇）十一月十三日の記事に、

せたのはし、かちにてぞわたる。更級の日記には、むかしみかどの御むすめをぬすみて、あづまへにげ下る者の、追はれじとて、この橋を引きたりけりとなん、今は何のためならねど、朽ちぬるなば絶えまがちなり。

（日本古典文学全集・中世日記紀行集『春の深山路』三六九頁）

とあり、『更級日記』の「たけしげ」伝説が、十三世紀末頃には限られた人の間には知られていたことが伺われる。このことから、『とはすがたり』の作者後深草院二条が『更級日記』に影響を受けていた可能性は否定できないが、武蔵野の原野を横切り、内陸部を往き来する道の情景として記されていることは注目される。『西行物語』にも、

さしていづくを志すともなければ、月の光に誘はれて、遙々と武蔵国に分け入るほどに、尾花が露に宿る月、未越す風に玉散りて、小萩がもとの虫の音いと心細く、武蔵野の草のゆかりをたづねけむもなつかしく、「宿をば月に忘れて、明日の道

行きなむ」と口ずさみて行くほどに、道より五六町ばかりさし入りて、経を誦誦する声のしければ、「人里はこの末に、遙かに隔たりたるところとこそ聞きしに、あやし」と思ひて、声につきて尋ね入りて見れば、わづかなる庵の上をば、葛、刈萱にて葺き、萩、女郎花色々の秋の草にてめぐりをかこひ、夜臥す所とおぼえて、東に寄りて蕨のほろを折り敷き、西の壁に絵像の普賢を掛け奉り、御前には法華八軸を置かれたり。

(講談社学術文庫 桑原博史『西行物語』全訳注 一三六頁)

西行が修行のため武蔵国を行く時の武蔵野の風景が描かれている。それは『更級日記』の描く世界に通じるものがある。

ところで武蔵野の原野を横切ったとすると、今度は「浜も砂子白くなくなく、こひぢのやうにて」という記述に解釈を阻まれる。「浜」・「砂子白く」というからには、太井川の川岸を描写したというには無理がある。この記述はどうしても海岸の風景であり、孝標一行の通った道筋は(二)で述べた東京湾沿岸に沿った古代東海道であったということになる。この矛盾を解消する一つの考えとして、孝標が四年前に上総へ赴任した時には、恐らく寄り道などしなかつただろうから、古代東海道を利用して任地赴いた可能性が高い。そうだとすれば当時八歳であった作者には東京湾の記憶が残っていたかと思われる。つまり「浜も砂子白くなくなく、こひぢのやう」な海岸の印象である。そのときの思い出をここに混在させたのではないだろうか。『更級日記』の作者が、往路・復路両方の情報を書き記した結果、道筋にも混乱が生じるのかもしれない。もしかしたら帰京に際して寄り道をしたことを、あまりはつきりさせたくなかつたのかもしれない。孝標一行が帰京に費やした日数は約三箇月であった。どこかに寄り道して日数が経過してしまつた可能性は否定できない。

(五) たけしば伝説と菅原道真の新事実

右のように、孝標一行が古代東海道の道を進まず、道なき道を武蔵の内陸部に進んだと想定した時、その地で孝標女は先に引用した「たけしば」伝説を耳にした。それを日記に書き記したことで、孝標女よりも二百五十年ほど後に飛鳥井雅有も「たけしば」伝説を知ることができた。その内容は『更級日記』に次のように記されている。

蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひしげりて、中をわけゆくに、たけしばといふ寺あり。はるかにははさうなどいふ所の、らうの跡の礎などあり。いかなる所ぞと問へば、「これはいにしへたけしばといふさかなり。

国の人のありけるを、火たきやの火たく衛士にさしたてまつりたりけるに、御前の庭を掃くとて、『などや苦しきめをみるらむ、わが国に七つ三つくりすゑたる酒壺に、さし渡したるひたえのひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ』と、ひとりごちつぶやきけるを、(中略)住ませたてまつりける家を、宮など失せたまひにければ、寺になしたるを、たけしば寺といふなり。その宮のうみたまへる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。それよりのち、火たきやに女はゐるなり』と語る。
(二八七―二九〇頁)

この話の概略は、武蔵から衛士として上京していた男が、望郷の思いから郷里の風になびく酒坪の瓢箪の歌を歌っていると、偶然それを聞いた帝の姫君が、自分を男の郷里に連れて行くことを命じた。男は七日七夜で武蔵へ姫を連れ帰る。帝は追っ手を派遣し姫を連れ帰そうとするが、姫は自らの意思で武蔵の地に来たことを告げ、帰京を断る。帝は武蔵一國をその男に与え、婚姻を認める。男は家を内裏のように仕立て、姫と暮した。その跡が寺になり「たけしば寺」といわれる。二人の子どもは武蔵の姓を名乗った。

この伝説は孝標一行が訪れた地に語り伝えられたと思われるもので、孝標女がその地を訪れたおかげで運よく採取し、後世の人々も知ることができたものであった。前節で引用した『春の深山路』の一節からも、中世の都人の間に関心を以て受け止められたようである。ところで、この「たけしば」伝説に関しては従来多くの研究者によって検討が加えられてきた。その中でも早く西角井正慶氏が、西角井家に伝わる武蔵宿禰家の系図である「西角井従五位上物部忠正家系」について注目すべき報告がされている。氏はこの系図に「武蔵武芝」の名を見出し、『更級日記』の「たけしばのをのこ」と『将門記』に登場する「武蔵武芝」が無関係ではないことを指摘した。(『古代祭祀と文学』「出雲と武蔵と」) また佐々木虔一氏は、この「西角井従五位上物部忠正家系」にある「武蔵武芝」に付された、

郡司判官代外従五位下、承平八年二月、国司守興与王、介源経基と不和争論す。この事によりて郡家を退き氷川の祭事に預からず

という傍注に注目し、武蔵武芝が将門の乱を契機として氷川神社の祭祀権を失い失脚したことを指摘した。

一方で益田勝美氏は次のように論じている。長くなるが引用しよう。

この話自体は衛士の逃亡譚であり、ほんとうは武芝の男を中心に語られており、かれが武蔵の国を支配し、「おほやけごともなさせじ」と課役免除を受けるところが、衛士役からの逃亡がかえって最大の成功・致富となる、というふうに語り伝えていく民衆の心理が、そこに息づいている。かれらは武芝の男の逃亡という形の抵抗を浪漫的に美しく語り上げ、その中で苦しい生活からの解放を空想しているのである。

そしてさらに見逃せないのは、この話がまったくの事実無根ではないらしいことである。皇女と武芝の子孫たちは、「武蔵という姓を得た」というが、『続日本紀』によると、実際に「武蔵という姓」の突然の出現があったのである。武蔵宿禰ができたのは神護景雲元年（七六七）十二月壬午であった。

武蔵の国足立郡の人、外従五位の下丈部直不破麻呂（おほとものあたひふはまる）等六人に、姓武蔵宿禰を賜ふ。

しかも、同月甲申、すなわち賜姓の翌々日には、またまた、「外従五位の下武蔵宿禰不破麻呂を武蔵の国造（くにのみやつこ）となす」とある。男に武蔵の国を預け取らせた、というのは、この国造に任じたことではなからうか。伝説の武芝の男とは、まさに彼不破麻呂ではないか、と思わせる史料である。不破麻呂の外従五位下というもとの位からすれば、彼は身分的には、足立郡の郡司層の一員であるが、郡の大領でも、少領でもない。それが賜姓直後一躍国造となり、さらに翌々年には、「外従五位の下武蔵宿禰不破麻呂を上総の員外の介となす」と、国司階級に加えられる。これは、その年六月のことだが、その直後八月には、「外従五位の下武蔵宿禰不破麻呂に従五位の上を授く」と、いよいよ五位どまりの地方豪族の外位コースから、中央貴族の内位コース（内位の方は、ただ従五位の上といい、内従五位の上とはいわない）に進み出たのである。外位コースから内位コースへ、外従五位の下から従五位の上への、この一階の加階の意味はひじょうに大きい。こういう足立郡の武蔵宿禰家の異常な躍進ぶりの背後には、何かがなくはならない。

（益田勝美の仕事Ⅰ『説話文学と絵巻』三一～三三頁）

「武蔵国足立郡の人、外従五位下丈部直不破麻呂」が異例の出世をし、「姓武蔵宿禰を賜ふ」とする史実と、『更級日記』の「やがて武蔵といふ姓を得てなむありける」とが重なり合い、両者の間に関連性がある事実を見出したのである。益田勝美氏はこの不破麻呂こそが『更級日記』の「たけしげ」の男であろうと推測し、この武蔵宿禰不破麻呂の末裔にあたる武蔵武芝は「氷川の

祭事に預からず」とあることから、恐らく代々武蔵一宮でもある氷川神社の祭祀権を掌握していたと考えた。

さて、天慶元年（九三八）の坂東における将門の乱のきっかけは、国司である武蔵権守興世王（おきよおう）、介源経基と足立郡司判官代武蔵武芝との衝突であった。武蔵武芝の家系は、武蔵という氏が物語るように、「姓武蔵宿禰を賜（たまわ）」った武蔵宿禰不破麻呂の末裔にあたり、武蔵国造家に連なる坂東の典型的な土豪であったと思われる。この武蔵武芝のことが記される『将門記』の一節を引用すると、

然る間に、去んぬる承平八年春二月中を以て、武蔵権守興世王、介源経基、足立郡司判官代武蔵武芝と、共に各不治の由を争う。聞くが如くは、国司は無道を宗と為し、郡司は正理を力と為す。其の由、何となれば、縦へば郡司武芝は、年来、公務に恪謹（かくごん）にして誉れ有て、謗りなし。苟くも武芝の、郡を治むるの名は、頗る国内に聴ゆ。撫育の方は、普く民家に在り。（中略）

時に、将門は急に此の由を聞きて、従類に告げて云はく、「彼の武芝は我が近親の中にあらず。又彼の守、介は我が兄弟の胤にあらず。然れども彼此が乱を鎮めむが為に、武蔵国に向ひ相むと欲ふ」てへり。即ち自分の兵杖を率ゐて、武芝が当の野に就けり。武芝申して云はく、云々（日本古典文学全集『将門記』四九〇―五一頁）

『将門記』の筆者は武蔵権守興世王、介源経基ら国司を批判し、郡司武芝側に立ち、武芝を立派な人物として褒めている。武芝は在地の人々の間に人望があり、農民たちは武芝を頼みにしていた。武芝は公務を忠実に務め、民を慈しみ郡を立派に治めている、と書かれている。ここに武蔵権守興世王、介源経基が不法に介入してきたため敵対したが、その後将門が仲介に入り興世王とは仲直りする。しかし経基は武芝に攻められ京に逃げ延びて将門、興世王の謀反を告発した。将門の乱の原因はまさにこの武蔵武芝の行動が引き金であったことが分かる。この事件以降、武芝のことは『将門記』には全く記されることがない。しかし太田亮氏は次のような見解を表明している。

武芝の事は系図に「郡司判官代、承平八年二月、国司守興与王、介源経基と不和争乱す。此の事に依りて郡家を退いて氷川祭事に預からず」と見ゆ。其の女、社務を相承し、武蔵介菅原正好の妻となり、菅原朝臣正範を産む。而して正範、外祖父武芝の跡を継ぎ、氷川社務司となれり。其の子を足立郡司行範と云ふ。もし然らば、血系これより菅原氏に移るか。

（太田亮著『姓氏家系大辞典』六卷「ムサシ」の項）

文中に出てくる武蔵介菅原正好を遡っていくと、菅公の父、是善の兄善主（勘解由次官、従五位下、承和九年九月卒）に至る。同じ菅原氏といっても道真より前の代に枝分かれしていることになる。平将門と深い関係を有する武蔵武芝の末裔に菅原氏が結びつき、氷川神社を取り仕切っていた頃、丁度孝標一行が帰京の途に就いていたことになる。そして孝標一行が太井川を渡り、古代東海道を逸れて向かった先は、実はこの菅原氏が社務を取り仕切る、武蔵国一の宮の氷川神社ではなかったか、と推測されるのだ。実は大宮市氷川神社の隣接地に九世紀～十一世紀前半の寺院跡が存在したことが大宮市遺跡調査会の発掘調査によって明らかになっている、ということも付け加えておこう。（『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B-17号遺跡』1993年）

さて、『更級日記』は、この「たけしげ」の逸話の後の記事に、

野山蘆荻の中をわくるよりほかのことなくて、武蔵と相模との中にゐて、あすだ川といふ、在五中将の「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり。中将の集にはすみだ川とあり。舟にて渡りぬれば、相模の国になりぬ。

（二九〇頁）

と「あすだ川」のことが記される。これは「隅田川」を指していることは間違いない。しかし、この「武蔵と相模との」間を隅田川が流れるという記述に矛盾があることはすでに多くの研究者が指摘するとおりである。前に「太井川」が「下総と武蔵の境にてある太井川」とあり、ここではまた「武蔵と相模との中にゐて、あすだ川といふ」という前後二度にわたる誤記には、単なる記憶違いというだけでは説明できない日記作者のある思いが見え隠れする。『伊勢物語』には、

なほゆきゆきて、武蔵の国としもつふさの国とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河といふ。

（日本古典文学全集『伊勢物語』一四二頁）

とあることは平安朝の歌詠みにとっては周知の事実であり、『更級日記』の作者がその事実を誤って記したとは考えにくい。彼女が恐らく『伊勢物語』を読んでいたことは、上総から帰京の翌年、治安元年の記事を御物本で見ると次のよう書かれていることから推察されるのだ。

源氏の五十余巻、ひつに入りながら、さい〇〇、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入

れて、得てかへるここのうれしきぞいみじきや。

(三〇二頁)

これは「をばなる人」から孝標女が物語を譲り受けた時のことを記したのだが、御物本では「さい」の次に二字分の空白があり、その傍らに小さく「中将」と記されている。「在中将」は在原業平のことであるから、これは『伊勢物語』を指すと考えられ、彼女が『伊勢物語』を所持していた可能性は高い。とすれば『伊勢物語』の記述を知っているながら敢えてそれとは異なる記事を記した可能性が高い。つまり自分が実際に旅して得られた知識によれば、「下総と武蔵の境」にあるのは「太井川」であったのだ。なぜなら孝標たち一行は「隅田川」を渡らず、そのまま内陸部へ進路を変更し「たけしば」の伝説を耳にした。このことについてはすでに述べた通りである。しかも「隅田川」の名称は上流域になると別の名称に変わってしまう。古代隅田川は旧利根川と旧入間川の最下流の名称で、その上流域で枝分かれした河川を何度か渡るうちに、『伊勢物語』によって型にはめられた東国の地理とは異なる、彼女の体感による新たな東国の姿が彼女の中に形作られていたのではないだろうか。しかも『伊勢物語』には名場面として描かれた場所も、実際には思ったほどのこともないという、『伊勢物語』への対抗意識が働いたと考えられる。この背景には、『伊勢物語』によって確立された東国の歌枕に取って代わり、新たな東国の歌枕を打ち立てたいという『更級日記』作者の野望が透けて見えるような気がする。そしてこのような思いの背景には、作者が宮仕えする祐子内親王家の存在が影響しているのではないだろうか。

それではつぎに孝標一行が、武蔵国一の宮である氷川神社を目指した本当の理由が何であったのか、それを考えてみたい。

(六) 「将門記」における菅原道真

前節では孝標一行が太井川を渡ったあと、古代東海道を利用せず道も整備されていない武蔵野の野原の中を通って向かった先は、武蔵国一の宮の氷川神社ではなかったかということはずでに述べた。ではなぜ氷川神社なのか、その理由は何であったのか。それを明らかにするため『将門記』の次の一節を見てみよう。

天慶二年（九三九）十二月十一日、将門は数千のつわものを引き連れ下野国へ押しかけ、十五日には上野国に入る。その後、国府を支配して庁舎に侵入し、東西南北の門を閉めて諸国の除目を行った。そのとき、予期しない事が起きた。

時に、一昌妓（かむなぎ）有りて云へらく、「八幡大菩薩の使ひなり」と口走り、

「朕が位を蔭子（おんし）平将門に授け奉る。其の位記は、左大臣正二位菅原朝臣の靈魂表すらく、右八幡大菩薩、八万の軍（いくさ）を起して、朕の位を授け奉らむ。今、須らく卅二相の音楽を以て、早くこれを迎へ奉るべし」と。爰（ここ）に将門は頂に捧げて再拝す。況むや四の陣を挙りて立ちて歛び、数千併しながら伏して拝す。

（日本古典文学全集『将門記』六二頁）

ここで「昌妓」というのは巫女のことであり、その巫女が神がかりとなって現れ、託宣が行われた。「朕」とは、応神天皇の化身たる八幡大菩薩の自称と思われる。次に「其の位記は、左大臣正二位菅原道真朝臣の靈魂表すらく」云々と託宣は続く。「位記」とは位階を授けることを記した文書、「表」とは事理を明白にして君に告げる文書ということ。従って、八幡大菩薩・応神天皇が皇位を将門に授けるのであるが、その命により将門を皇位につける旨を記した文書を、菅原道真の靈魂が取り次いだというのである。それから将門は位記を額の上に捧げ持ち再拝した。四門を固めていた軍兵も総立ちとなり、歛声を上げ、数千の人々はいっせいに伏し拝んだ。

志を遂げずに敗死した将門は、のちに菅公と同様に御霊神として恐れられるようになるのだが、梶原正昭氏は「菅公の怨霊が藤原氏一門のみでなく天皇家をも脅かすものとしてとらえられていた觀念が、現天皇に対立するかたちの新皇受託のこの場面に、ことさら菅公の霊を登場させることになったと考えられる」（東洋文庫Ⅱ解説）と推測している。

将門記によれば、「菅原道真」は「八幡大菩薩」と同様、東国武士の尊崇を集めていた。それは道真の靈魂が、将門が即位する後盾であったという記述によっても納得されよう。東国の武士たちにとって、菅公は八幡大菩薩と同等の神として、絶大な尊崇を集めていたことは様々な事実によって証明される。梶原正昭氏の言うように、菅公の怨霊が藤原氏一門のみでなく天皇家をも脅かすものとしてとらえられていた觀念が、現政権に対立しながら敗死した将門との類似性から、親近感を抱かせたものと考えられる。

「菅原道真」が東国の地で崇められていたことについては、後藤祥子氏が次のようにまとめている。

実は将門の蹶起よりさらに十年早く、道真の遺児たちが常陸・下総の地に、しかも『将門記』の人物たちと並々ならない関わりの中で、日本最古の天満宮、道真の墳墓を築いていたと見られているのである。梶原正昭・矢代和夫氏の『将門伝説』によれば、はじめそれは延長四年（九二六）二月、筑後山麓の真壁郡紫尾村大字（現・真壁町）羽鳥の地に建てられ、（中略）三年後の延長七年の天神忌には下総の結城郡（現・水海道市）大生郷に移されたという。大生郷は将門ゆかりの岩井に近く、

この移転には将門の招致が想像されるといふ。

(後藤祥子『更級日記の作者と東国』(四四五頁)・木村正中編「論集日記文学」)

将門が敗死し、八十年の歳月が過ぎ去ったとはいえ東国の武士集団の間には菅原道真に対する篤い尊崇の思いが受け継がれていた。その中心となって社務を取り仕切っていた武蔵武芝は、天慶の乱後将門とともに表舞台から姿を消したが、娘に氷川神社の権限を譲り、しかもその娘婿が菅原氏であったことは(五)で引用した『姓氏家系大辞典』の記事によって明らかにした。そのことは、天満宮の威光をさらにこの神社に取り込むことに貢献したに違いない。社務はそれ以来、代々の菅原氏に受け継がれ、篤い武家集団の信仰を集め続けた。そうした折、道真から数えれば五代の直系子孫にあたる孝標が上総の国司の任を果て帰京すると聞いたので、この地に招きもてなすことは神社にとつて意味あることであつたに違いない。この招致を受けることはまた孝標にとつても名誉なことであつたのではないか。しかしこの辺の事情についてはただ想像するばかりで、『更級日記』は一切語っていない。

この十年ほど後、孝標は齡(よわい)六十歳を迎え、今度は常陸の介として再び東国に赴任することになった。本人には納得のいかない任命であつたようだが、朝廷側としては不気味な動きをする東国の武士団を抑え込む切り札として送り込まれたとも考えられる。道真の直系子孫である孝標を送り込む効果を期待し、道真信仰を巧みに利用した中央政府の計らいではなかつたかと考えられるのだ。それを証明するかのように、孝標の孫にあたる清房は相模守となり、是綱は相模権守・常陸介・武蔵守を歴任するなど、東国地方の国司に任命されていることからその辺の事情が伺われる。

(七) その後の道筋

さて、孝標一行が下総から古代東海道を外れ、一路武蔵国一の宮氷川神社に向かつたと想定した場合もその後どのような道筋を辿つたかについて日記の記述は極めて曖昧である。ただ「たけしげ」の話が長々と記された後、唐突に次のような記述に切り替わるのであつた。

野山蘆荻の中をわくるよりほかのことなくて、武蔵と相模との中におゐて、あすが川といふ、在五中將の「いざこと問はむ」とよみけるわたりなり。

(二九〇頁)

「野山蘆荻の中をわくるよりほかのことなくて」という表現を信じれば、一行はやはり古代東海道は利用していなかったと考えるを得ない。だとすると、氷川神社のあった現在の大宮からあまり整備されていない道を南下し、武蔵国府（東京都府中市宮町）に向かった可能性が考えられる。そして続く記述に、

にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風たてならべたらむやうなり。かたつ方は海、浜のさまも、よせかへる浪のけしきも、いみじうおもしろし。もろこしが原といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日行く。
（二九一頁）

とあることから、武蔵の国府から南下し、浜田駅（海老名市国分寺台）あたりで古代東海道に合流し、次の箕輪駅（平塚市中原）から小総駅（おぶさ・小田原市国府津）を海岸に沿って進んだのではないだろうか。（参考文献 武部健一『完全踏査・古代の道』）
「もろこしが原」は現在の大磯の海辺と考えられ、昔高麗人が住んでいたことからそのような名称になったと言われているが、右の古代東海道の順路とほぼ合致する。この順路を「二三日」かけて行くというのは、あまりにも悠長すぎるが、この後に

足柄山といふは、四五日かねておそろしげに暗がりわたれり。やうやう入り立つふもとのほどだに、空のけしきはかばかしくも見えず、えもいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり。麓に宿りたるに、月もなく暗き夜の、闇にまどふやうなるに、あそびみたり、いづくともなくいで来たり。

「四五日かねて」とあり、「四五日以前から」と解釈するのが一般的だが、注釈書の中には一行が古代東海道を利用してやって来たなら「四五日前から」足柄山が恐ろしそうに見えたというのは距離的に考えてもあまりに時間がかりすぎるとして、「日」を「里」の誤写とし、「四五里にわたって」つまり南北に二十キロ程度にわたってという意味であると解釈するものもある。そこで「もろこしが原」の「おもしろ」さ、足柄山の「おそろし」さが彼女の記憶を変容させたという考え方もある。だがこれは一つの推測であるが、孝標一行が官道を逸れて遠回りした日数を取繕うとしたための表記であったとも考えられないだろうか。

最後に

『更級日記』の関東平野の旅については謎が多く、今回その問題に取り組んでみた。問題点をはっきりさせるために、孝標一行の旅を二つのケースに分けて考え、その整合性を比較してみたが、どうしてもははっきりした結論を見出すには至らなかった。大学一年生の時に『更級日記』に出会い爾来五十年、いまだに分からないことだらけである。しかしそこにかえって引き付けられる。今後も考え続けることは多い。